

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

「乗物の巻」を読む

浜口順子

およそ半世紀ほど前、幼児だった私はキンダーブックとどこかで遭遇していた。『キンダーブック』の「キン」の音に金属的なひんやりした感触を覚え、題字のロゴのいわくありげな重厚感にはやや気押されるような印象を抱いたような気がする。とはいうものの、幼少期の記憶というものは成長過程でいかにも改変されてくるものだ。当時そういう印象を實際に抱いたという確証はない。家で遭^あっていたのか、幼稚園の保育室で手に取っていたのか？

『キンダーブック』という幼児向けの教育絵本は、多くの方がご存じだろう。いや、私のように幼いころどこかで遭ったことがある、と思いつくものかもしれない。保育現場周辺に登場してから八十五年という長寿の定期刊行物。今も昔もフレールベル館から発行されてきた。その歴史のはじめ三分の一ほどにあたる二十八年間、この雑誌の編輯顧問を務めたのが倉橋惣三（一八八二～一九五五）である。彼は言うまでもなく、大正期から戦後にかけて、心理学、教育学の研究者として日本の幼児教育理論を牽引^{けん}してきた一人である（この『幼児の教育』誌も、その彼が長い間編集主幹を務め、研究の発信や現場啓発のツールとして活用した

雑誌である)。

一九二七(昭和二)年の創刊号は、和田實をはじめ、堀七蔵、河野清丸、岸邊福雄、そして倉橋らが賛助員として名を連ねていた。当時目幼幼稚園園長だった和田とフレール館の創立者高市次郎とが、幼児教育の教育教材開発に注いできた共同関係の上に、幼児の観察絵本

を作ろうとしたのが発端である。^{注1}その第一集第一編のテーマは「お米の巻」。その次の第二編

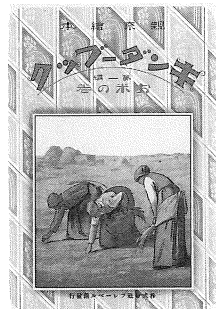
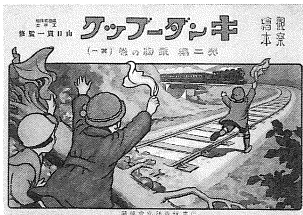
「乗物の巻」から、編集体制が顧問・主任制となり、編輯顧問は倉橋惣三と岸邊福雄だった。^{注2}

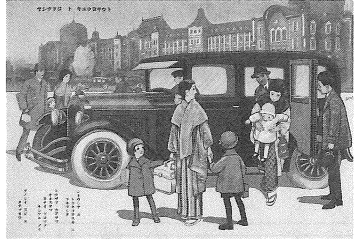
昭和に入り、世の中が大正期の童心主義的な子ども観から徐々に現実社会に適應する子ども観へと変化していく時代、倉橋は編輯顧問としてこの雑誌にかかわる。この連載では、その時代のキンダーブックを練りながらいろいろと考えてみたい。

「乗物の巻」(昭和三年三月刊)

まず表紙を見てみよう。原本を手にしてこの表紙と対面した時、紙芝居を思い出した。横長の版もそうだし、この号の表紙の絵は特にストーリー性を感じる。後続の号もストーリーがあるかというところ、そうではない。この号の表紙はいい、と素朴に思った。ぱっと見た瞬間は「線路のそばで子どもが遊んでいて危ない!」と思わされる。しかし、よくよく見ると……「ああ、大

きな木が倒れて線路をふさいでしまっているのだ。それを子どもたちが、迫り来る機関車に向かって、必死になって布を振って知らせているのだ」ということに気付かされる。思わず





引き込まれ、子どもの気持ちになり「それで、機関車はちゃんと止まったかな？」と表紙をめくると、中の一ページ目は、レンガの東京駅を背景に立派な黒塗りの自動車から降りる家族の図。ストーリー絵本ではない、と知らされる。左上に「トウキョウエキ ト ジドウシヤ」と書いてある。右から読む。当時のキングダーブックはカタカナの文字が多い。しかし同時代の幼児向け雑誌『コードモノクニ』ではひらがなも使っているから、当時の子どもはカタカナにもひらがなにも幼少期からなじんでいたのだろう。

ページごとに主題の異なる絵が続く。汽車に乗るまでの手順が示されるページ、蒸気機関車と電気機関車の全体像のページ。寝台車の内部が描かれるページには、

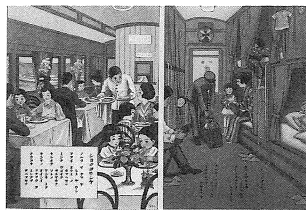
「セマイケレドモ オソウジガ キレイニデキタ シンダイシヤ

アシタノアサヲ タノシミニ ミナサンオヤスマ ナサイマセ」

といった、七五調を基本にした文がある。複数の文章が続くところは、たいていこうしたリズムミカルな文体になっている。

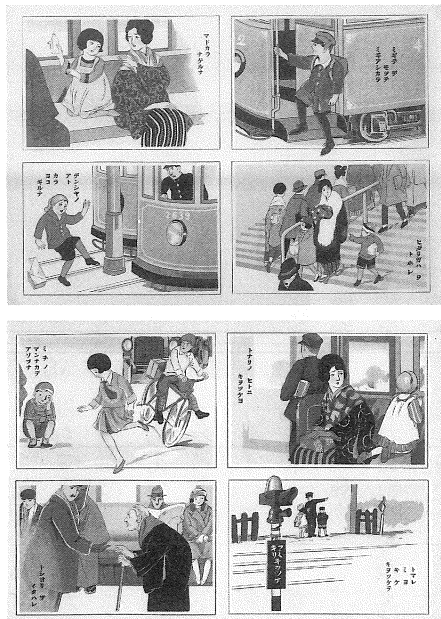
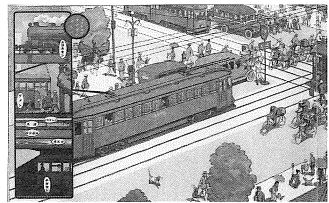
路上電車、自動車、自転車と人間がひしめき合うように行き交う交差点の図は、東京は銀座の交差点だ（昭和初期にもうこんなに混雑していたのかと、新鮮な驚きがある）。信号はなく、警官が赤と緑の旗を持って交通整理をしている。「ギンザ」という題名で、

「トマレ：ストップ ヒトモ デンシヤモ ジドウシヤモ オートバイヤラ ジテンシヤモ
オマハリサンノ サシツニテ パツタリイチドニ トマリマス ビリビリ ビリー スス

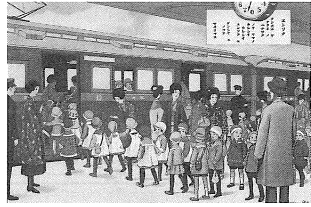


メ：ゴー チン チン ゴロ ゴロ ブー ブー シューシュー イチ
ドニ ドット ススミマス」。

その次のページには、「トウキヨウヲタテニキレバ」という興味わく図解がある。縦長の図で、水平に幾層をなして、空中から地下にかけて文明の利器が横切っている。上から下へ順に「カウカセン（高架線・機関車が通っている）―ヂメン（地面・人と市電）―デンワセン（電話線・地中を通る）―ガースライドウ（水道）―ゲスイ（下水）―チカセン（地下線・現在の地下鉄。前年に現在の地下鉄銀座線が開通している）」と説明が入っている（括弧内、筆者）。これは、観察絵本には珍しい抽象的な図ともいえるが、少なくとも保育者（保姆や保護者）の興味をそそるに違いない。



交通マナーのしつけを、二ページにわたり八コマに分けて描いているページ。「(市電に乗る際)ミギテヲモツテ ミギアシカラ」は、面白い。窓の方を向いて座っている女の子の足が自分の着物に触れるのを迷惑そうにしている婦人の図には「トナリノ ヒトニキヲツケヨ」とある。お年寄りに席を譲る図は、今も昔も同じで「トシヨリ ヲ イタハレ」。「ミチノ マンナカデ アソブナ」という注意は少し懐かしいほどだ。「エンソク」のページでは、着物姿の保姆たちが、ホ



ームで園児たちを順番に電車に乗せている。大正末からのこの時代、倉橋はちょうど橋詰良一の「家なし幼稚園」を強く推奨していたことを思い出す。園の建物から子どもたちを連れ出して、自然や町の観察をさせることが増えていたのだろう。

「タンポポ ヤ ナタネ ノ ハナサク ノヤ ヤマノ ウレシイ ウレシイ エンソク ニ デンシヤニ ノツテ マイリマス」。

巻末「附録」として、一層きれいな色刷りの図版「二寸法師お椀の舟」

がある。確かにこれも「乗物」だ。編輯後記に「今回から附録には、印刷技術の粋をこらした芸術絵を差上げます。御子様方の御部屋が追々新しい美事な絵画で飾られるでせう。御期待下さい」とある（後の号で、この附録が好評だったと報告されている）。この絵も含めてこの号の絵はすべての場朝二の作であるが、芸術性、写実性、情緒性等豊かに統一されている感がある。

巻末に「本誌のモットー」、

○児童生活の「心の糧」

○絵画を以て編まれたる連絡あり統一ある幼児読本

○理知と芸術の交響楽

とある。最初の「心の糧」については、注釈が解説ページに次のように書いてある。

「児童期に於いては世人が往々信じている様に、とかく空想にのみ馳するものではなくして、



現実の自然と人事——即ち目に見、手に触るる自己の環境——を凝視し、探究し、驚異しつつ、自己の内的生活を拡大していくのである。かかる時期に児童の要求する真の「心の糧」は徒なる想像や夢幻ではなくして、むしろ事実であり科学である」。

保育項目「観察」を實踐する上で、キンダーブックという教材が持つ効果は限られたものだ。もとより、子どもが観察対象とするのは生活全体である。しかし、保姆や保護者たち大人が「観察」で探究されるべき事実、科学とはどのようなものかを考えるヒントを得て、子どもたちと一緒に面白がつて「見る」体験をし、日常生活にその視野を拡大する教材には確実になり得ていると思う。一方で、紙のテキストしか持ち得ない強みというものはあるに違いない。「絵」という二次元の表現(メディア)を子どもが享受する経験について考えていきたい。—— 続く ——

(引用文は、一部現代仮名・文字遣いに適宜書き換えた。)

(お茶の水女子大学大学院)

注

1 『フレーベル館一〇〇年史』二〇〇八年 p.47。大正十五年の幼稚園令の發布により「観察」項目が加わったことが契機になって企画された。

2 編輯顧問 倉橋惣三・岸邊福雄(編輯主任 高市慶雄)、絵画顧問 清水良雄(絵画主任 的場朝二)、童謡顧問 西条八十(童謡主任 千葉省三)、童話顧問 巖谷小波、作曲顧問 小松耕輔(作曲主任 小松清)。倉橋と共に編輯顧問を務めた岸邊福雄は、東洋幼稚園の園長で、クレヨンやヒルの大型積み木を日本で初めて導入するなど、保育環境を積極的に改革し広く保育現場に影響を与えた。賛助員には和田實らが創刊号から引き続き名前を連ねている。